



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

芦名, 定道

CITATION:

芦名, 定道. あとがき. ティリッヒ研究 2006, 10: [1]

ISSUE DATE:

2006-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57642>

RIGHT:

あ と が き

『ティリッヒ研究』第10号をお届けするに当たり、まず、悲しいニュースをお知らせしなければなりません。本ティリッヒ研究会のメンバーである、熊谷一綱先生（関西学院大学名誉教授）が、去る2月3日（金）にご逝去されました。先生は、ティリッヒ研究を中心としたキリスト教思想研究者として知られ、これまで多くの研究論文を通して、日本のティリッヒ研究に大きな足跡を残されました。ティリッヒの信仰論をめぐる一連の論考はティリッヒ研究として大きな意義を有しており、先生の思索を引き継ぐことが今後の日本のティリッヒ研究に課せられた課題と言わなければなりません。とくに、本研究会にとっては、毎年の『ティリッヒ研究』の刊行のためにご寄付いただくなど、先生のご存在は大きな支えでありました。ここに感謝すると共に、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げたいと思います。

この一年の研究会の活動は、研究会メンバーがそれぞれ多忙になる中、ほぼ『ティリッヒ研究』第10号刊行に向けた研究会に限定して行われた。毎月1回の研究会の維持が困難な状況は、今後もしばらく続くことが予想され、本研究会に関しては、そのあり方を大きく転換することが求められている。現在検討されているのは、研究会活動を基本的にネット上に移行するという方向性である。研究会メンバーが、各自のティリッヒに関連した研究成果をEメールで交換し、質疑応答を経て、研究会のホームページに公開する、といった形態である。また、その際にメーリングリストの利用も考えられるであろう。しかし、こうした研究会の活動形態の変化については、後ろ向きに考えるのではなく、より活発な研究会活動を目指して、前向きに取り組むことが必要であり、ネット上への移行は、これまで地域的に限定されていた研究会を、より広く開いてゆくことを可能にするものと言えよう。具体的にどのような形になるかについてはまだ未定ではあるが、2006年度のティリッヒ研究会の新たな展開にご期待いただきたい。

研究会活動をネット上に移行するにあたり、その拠点となる研究会ホームページについても、ティリッヒ研究の情報交換の場として、いっそうの充実が求められる。この点についても、2006年度の早い段階で、一定のヴィジョンを示したいと考えている。

上記の研究会活動の転換に伴って、この『ティリッヒ研究』についても、いくつかの変更が考えられる。これまで本研究雑誌は、電子ジャーナルとしてホームページ上にPDFファイルを公開してきたが、それと同時に一定部数は、通常の紙印刷による雑誌として発行されてきた。今後は、電子ジャーナルとしての方向性をよりはっきりと打ち出して行きたい。これは、ネット上の研究会というあり方に対応したものであり、より自由度の大きな雑誌の刊行が可能になるものと思われる。また、それに合わせて、公開するPDFファイルの設定を変更することによって、セキュリティの面でも電子ジャーナルとしての形態を整えてゆきたい。いずれにせよ、『ティリッヒ研究』掲載の論文のレベルアップこそが、今後の最重要課題であることは言うまでもない。

以上のように、本研究会は、2006年度も新たな方向性を探りつつ活動を続けてゆく予定であり、関係の皆様にはいっそうのご協力をお願いしたい。

研究会代表

芦名 定道